

## 大いなる救いに至る道

創世記 46 章 1 節～34 節

2026 年 2 月 8 日

松田 基子師

神様は人間に自由意志を与え、人間の意志を尊んでおられるというのですが、ではなぜ神様は「**ご自身に信頼し、ご自身に従いなさい**」と命じられたのでしょうか。

それは、神様は人間の創造主であり、創造主である神様だからこそ、世界と人間一人ひとりが麗しく生きて成長する道を知っておられ、そのことを人間に教えたいと願っておられるからです。

そこで、神様は「**わたしに信頼して聞き従ってきなさい**」と招かれるのです。

しかし人間は自己中心に生きることを、自由だとはき違え、神様に聞き従おうとはしません。人間はその方が自分に納得でき、自分を幸せにすると思い込んでいるのです。

果たしてそうでしょうか。ヤコブの 11 番目の息子ヨセフは、神様に聞き従ったことによって一族を救いました。ヨセフは、父ヤコブの偏愛が災いして、10 人の兄たちから憎まれ、キャラバンに売られ、エジプトで奴隷とされてしまいました。ヨセフは夢も希望も断たれてしまいましたが、彼を生かした只一つの力は、神様を信じていたことでした。

彼は神様から夢を与えられていました。奴隷の状況からは、その夢は実現不可能に見えました。そんなヨセフが、奴隷という過酷な状況に投げ込まれても絶望しなかったのは、彼が「**神様は共におられる**」という信仰の確信に立ったからでした。彼はどんな理不尽な目に遭わされても、ただ神様に信頼して、現実を見つめながらも人を恐れることなく、心の目は天を仰いで、必ず神様の最善が現れることを確信したのです。

そのように神様に信頼し従うことが、どんなに確かな人生を生きることになるのか、それは創世記 45 章に記されています。

神様はヨセフをエジプトの王に次ぐ地位に就かせられました。今やヨセフは自分の思いのままに、誰の人生も自由にできる権力が与えられていました。飢饉に遭い、エジプトに穀物を求めに来た兄たちは、その権力を持つヨセフの前にひれ伏すことになりました。ヨセフには彼らが兄たちだと分かりましたが、兄たちにはヨセフとは分かりませんでした。ヨセフは兄たちを困惑させ、試した上で、兄たちがヨセフを憎んだこと、奴隷に売ったことに罪を覚えて苦しんでいることが分かったと、自分の身を明かしました。創世記 45 章 4～8 節には、その感動的な場面が記されています。

「ヨセフは兄弟たちに言った。『どうか、もっと近寄ってください。』兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。

『わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。』」（創世記 45：4～8）

ヨセフはこの言葉を語る時、彼の目は兄たちの姿を見つめていましたが、心の目は神様を見上げ、人間的な思いを一切捨て去っていました。ヨセフはこの時だけ神様を見上げたわけではありません。彼は常にそうしていたからこそ、一番大事な場面で神様を見上げて、神様の御心をはっきりと語る

ことができたのです。

そんなヨセフも、奴隷に売られた当初は、兄たちに裏切られた悔しさ、あまりの仕打ちに憎しみを覚えたでしょう。でも、そのような中で神様以外に頼れる存在はなく、神様に心を向け続けていった時に、神様が共におられる実感、神様への期待、神様の最善を信じることができ、兄たちのことは神様に委ね、神様の御心のみを求めたのです。

もしもヨセフの人生が憎しみと恨みの人生であったならば、心は悪しき思いに占領されて、苦しみ続けなければならなかったことでしょう。彼は神様に信頼して聞き従うことによって、真の自由、喜び、感謝を体験することができました。

その生き方はまた、周りをどれほど祝福に満たしたことでしょう。兄たちはヨセフの赦しを受けて、罪に責められてきた心の重荷が取り除かれ、喜びに溢れました。赦されて和解できることほど心を平安にしてくれるものはありません。

ヨセフは兄たちとの和解の後、飢饉はまだ5年も続くこと、この飢饉は命を危険にさらすものであることを語り、父ヤコブと一族は皆エジプトに避難してくるようにと勧めました。

兄たちはこのヨセフの言葉を持って父ヤコブのもとに帰ると「ヨセフがまだ生きています。しかもエジプト全国を治める者になっています」と報告しました。

すると「父は気が遠くなった。彼らの言うことが信じられなかったのである」（創世記 45:26）と記されています。

兄息子たちの欺きにより、愛するヨセフは野獣にかみ殺されたと思い込んでいたヤコブの耳に、ヨセフは生きていますと聞かされても、それは信じられないことでした。しかしヨセフが父を乗せるために遣わした車を見て、心が動き、元気が出てきたのでした。

そうと分かれば一刻も早くヨセフに会いたいも

のです。ヤコブは神様に感謝が溢れました。

「ああ、神様があの子を愛し、あの子と共にいて、全ての危険から助け出してくださったのだ。神様の助けなくして、あの子が今生きていることはできない。神様ありがとうございます」と感謝に溢れるのでした。

ヤコブ一族皆揃ってエジプトに向かって出発しました。ヤコブはカナンの地を離れるにあたり、神様を礼拝せずして出発することはできませんでした。エジプトへ向かう途中、ベエル・シェバに立ち寄りました。そこは祖父アブラハム、父イサクが神様を礼拝した大切な場所でした。

ヤコブは神様への感謝に溢れて、いけにえを献げて礼拝しましたが、一つ気がかりなことがありました。父イサクも飢饉に遭った時、彼がペリシテ人の地まで来ると、神様は「エジプトへ下って行ってはならない」（創世記 26:2）と止められました。そのことを思う時、ヤコブは不安でした。

そのヤコブの心をご存知の神様は、夜の幻の中で語りかけられました。

「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す。ヨセフがあなたのまぶたを閉じてくれるであろう」（創世記 46:3~4）との約束をお与えになりました。

神様の「わたしがあなたと共にいる」との言葉は、ヤコブが兄エサウの怒りを逃れてメソポタミアの伯父ラバンのもとへ向かう途上、ベテルにおいて神様がヤコブに初めて現れてくださった時からの言葉でした。あの時も神様は、

「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（創世記 28:15）と

言われました。神様はヤコブを祝福の担い手に選ばれた以上、一族が生かされていく道へと導かれるのです。

ヤコブは神様がエジプト行きを許し、共におられるとの約束を得てベエル・シェバを出発しました。その心は晴れて、ヨセフが晴れ着を着て元気よく兄たちの問安（もんあん）に出かけた時の顔が目に浮かび、ヨセフ会いたさに心がはずみました。

ヤコブはユダを先導者としてゴシェンの地でヨセフに再会しました。親子の再会は感動的でした。

ヨセフは父ヤコブを見るやいなや、迷子になった幼児が自分を探す父親と出会って、父の胸に飛び込むように、父の首に抱きつき、しばらく泣き続けました。ヤコブも感無量で「わたしはもう死んでも良い。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから」（創世記 46:30）と答えました。ヤコブは野獣に殺されたと思っていたヨセフに会うことができて、その心は、今まで何によっても埋めることができなかった欠けが満たされ、喜びでいっぱいになりました。神様が共におられる人生とは、なんと祝福に満ちていることでしょう。

「神様がともにおられる」それは神様の御言葉を聞いて、御心を悟り、聞き従うためです。ヨセフもまた神様をしっかりと見つめ、その御心を悟ることに傾注してきたことによって正しい判断をすることができました。

ヨセフは兄たちと和解した時にはっきりと言いました。「神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。」

ヨセフは「神様は一族を飢饉から救おうとして、その備えを自分に当たらせ、今生かされている者たちを残りの者として、エジプトに導いて生かしてくださるのだ。神様はヤコブ一族ばかりでなく、一族を通して大いなる救いを与えることを願って

おられるのだ」との御心を悟り、その使命を強く感じました。それとともに一族皆がその使命に生きることを願いました。

そこで彼は一族をどこに住ませるかを考えました。ヨセフが選んだ土地はゴシェンでした。エジプトはナイル川によって繁栄した国です。特に広大なデルタ地帯は肥沃（ひよく）でした。それだけに農業だけでなく、様々な部門が栄えていました。ヨセフはそのようなエジプト色の強い所には一族を住ませるべきではないと考えました。ヤコブの一族は羊飼いです。羊に必要なものは牧草です。小麦を生産するほどに肥沃である必要はありませんが、ある程度の肥沃さは必要です。ゴシェンはデルタ地帯も中央から離れた東の端で、荒れ野に隣接する牧草地帯でした。

ヨセフは一族がエジプト人に同化することなく、ゴシェンで羊飼いであり続けることが信仰を守り、神の祝福を担っていくのに相応しいと考えました。

そこでヨセフはファラオから一族の居住地としてゴシェンの地を許可してもらうために、兄たちに語るべき言葉を与えました。

「ファラオがあなたたちをお召しになって、『仕事は何か』と言われたら、『あなたの僕である私も、先祖代々、幼い時から今日まで家畜の群れを飼う者でございます』と答えてください。そうすればゴシェンの地域に住むことができるでしょう」（創世記 46：33～34）と。

エジプトではナイルの恵みを受け、農業が盛んでした。遊牧民は野山の牧草地を歩き巡り、時に農地の周りにやってくるので、厄介者と考えられ、嫌われていました。

ヨセフは一族がエジプトの豊かさに魅力を感じて信仰を捨て、使命を見失うことを最も恐れていました。一族にとってエジプトの地はあくまでも「寄留の地」であり、神様から「カナンに帰りなさい」と言われる時に備えていなければなりません。

遊牧であれば羊を追っていつでも帰ることができます。

ヨセフは 5 人の兄たちを連れてファラオに謁見しました。ファラオは兄たちの願いを聞き入れ、ゴシェンに住むことを許可しました。

このようにしてエジプトにやってきたヤコブ一族の人数は、息子の妻たちは数えられていませんが、総勢 70 人と記されています（創世記 46:27）。70 は完全数であり、神様の御業であることを示しています。

ヤコブの一族はこうして飢饉から救われ、命を永らえました。神様は何のためにヤコブ一族の命を生かされたのでしょうか。

ヨセフは、それは「**大いなる救いに至らせるため**」と言いました。一族が子々孫々、神の民とされ、神様の祝福を担っていくことを意味しました。

しかし、神様の**大いなる救い**のご計画は、ヨセフが思いも及ばなかった偉大なものでした。

神様は罪に滅び行く人類に、永遠の救いを与えたいとの願いから、神の御子をヤコブの系譜からイエスの名を与えて誕生させ、全人類の罪を負わせ、身代わりの十字架にかけて罪を贖わせたことによって、イエス・キリストを通して永遠の御国に入れるようにしてくださいました。

その証明として、キリストは十字架の死から三日目に復活されましたが、神様の御許（みもと）に帰られると、聖霊によって地上の誰とも一緒に居ることが出来るようになりました。

そこでイエス・キリストの救いを信じて受け取った人は、イエス様が「**いつも共にいる**」と言われた言葉を信じ、聖書を通して語られる御言葉に耳を傾け、御心を悟って聞き従っていくなら、イエス様が永遠の御国まで導いてくださり、永遠の御救いを受けるのです。これが真に「**大いなる救い**」に至る道です。 **イエス様といつも共にいる**ということとは、御言葉に聞き従うためです。

神様の願いは、すべての人がこの道に導かれて、大いなる御救いに至ることです。

私たちも、ヨセフが肉体の目ではこの世界を見ながらも、心の目は神様の御心を求めて従ったように、神様の心そのものであるイエス・キリストを見つめましょう。

私たちは日々様々な出来事の中にあって、どう判断し行動すべきか思い悩みますが、**イエス様は共にいてくださる**ことを確信して「**イエス様に心を向けさせてください。御心を示してください。従う勇気を与えてください**」と祈りつつ歩んで参りましょう。それと共に、このキリストと共に歩み、キリストに聞き従って生きる人生こそ永遠の救いに至る道であることを、周りの人々に証しし 御救いが更に広がっていくことを求めてまいりましょう。

お祈りいたします

愛と憐れみに満ちておられる神様

あなた様は私たちを永遠の御救いに至らせるために「**イエス様といつも共にいて御心を悟り、聞き従いなさい**」と招いてくださっていますのに、自分の思いに生きては躍き（つまずき）、苦しんでは「**主よ**」と呼び求めるようなことをしています。どうか主がいつも共にいてくださることを確信し、主に祈り、御言葉を求め、御心を悟り聞き従って行く者としてください。イエス様と共に歩み、永遠の御国に辿り着かせてください。

救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り致します。      アーメン